

#### 4 医療人 GP「赤ひげチーム医療人の育成」における連携教育・支援

井口清太郎

新潟大学地域医療教育支援コアシテーション

#### Interprofessional Education and Support for “Akahige” Team Project

Seitaro IGUCHI

*Center for Education and Support of Community Medicine,*

*Niigata University Medical and Dental Hospital*

#### 要 旨

文部科学省が募集した平成17年度の医療人GPにより、新潟大学医歯学総合病院に地域医療教育支援コアシテーションを設置し、活動を行ってきた。活動の二つの柱は、一つは「学部学科を超えた学生によるワークショップとフィールドワーク」であり、もう一つは「地域支援テレビシステム」である。これらの取組を具体的な例をあげて概説した。

また、これらの活動を通じて、地域医療教育に必要な地域医療機関や地方行政機関との連携を構築してきた。これにより地域医療機関、地域行政機関の中にも医学教育に携わってきているという意識を共有・醸成できてきている。今後もさらに連携を深め、地域医療教育の推進を目指したい。

キーワード：ワークショップとフィールドワーク、地域支援テレビシステム、地域医療教育、連携

#### はじめに

新潟県は人口10万人あたりの医療機関従事医師数が全国で下から6番目と著しく少ない一方で、広い県土を持ち、また佐渡などの離島や、世界でも有数の豪雪地帯を抱えている。このような中、私たちは平成16年に中越地震を、そして平成19年には中越沖地震を経験した。この経験から得た知見は、個々の医療人としての限界と、機能を完結できるチームとしての医療支援こそが、被災地において有効なものであり、地域医療においても同様にチームとしての医療が必要であり、かつ

継続性があると考えた。

これらの経験をもとに、新潟大学では平成17年度、文部科学省の募集した医療人GP「地域医療等社会的ニーズに対応した医療人教育支援プログラム」に応募し、「中越地震に学ぶ赤ひげチーム医療人の育成」プログラムが採択された。

本プログラムでは、地域医療に情熱を持ち、地域社会のニーズに全人的に対応できる総合医療チーム「赤ひげチーム」を統率できる医師を育成すること、地域医療を担う医師が定着できるように大学病院との連携・支援体制を新たに構築することを目標として、大学病院内に地域医療教育支援

Reprint requests to: Seitaro IGUCHI  
Center for Education and Support of  
Community Medicine  
Niigata University Medical and Dental Hospital  
1-754 Asahimachi - dori Chuo - ku,  
Niigata 951-8520 Japan

別刷請求先：〒951-8520 新潟市中央区旭町通1-754  
新潟大学医歯学総合病院 地域医療教育支援コアシ  
テーション 井口清太郎

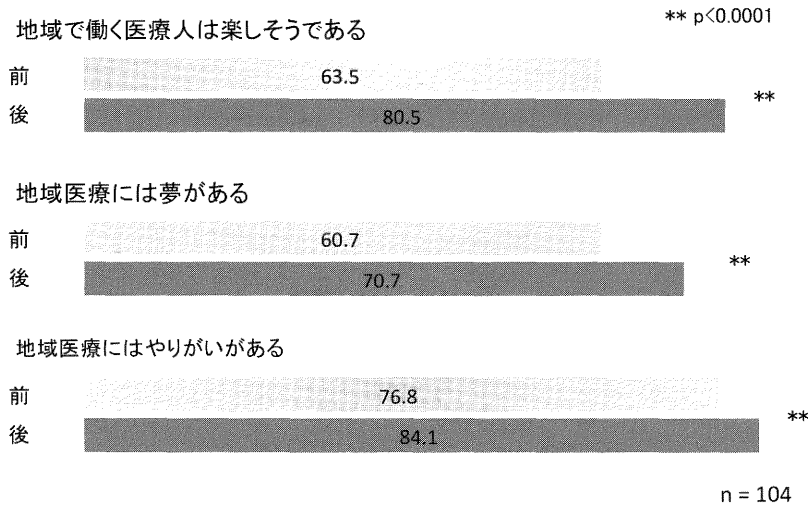


図1 ワークショップとフィールドワーク前後における Visual analog scale (VAS) による比較 (1)

コアステーションを設置した。そしてこの地域医療教育支援コアステーションを核として「赤ひげチーム医療人の育成」プログラムを実施した。

本取組の対象となるのは、卒前教育においては新潟大学医学部医学科、医学部保健学科、歯学部口腔生命福祉学科の医療系多職種の学生である。また卒後教育では、新潟大学臨床研修病院群研修プログラムに参加している研修医、あるいは既に新潟県内の地域医療機関で勤務している勤務医である。

これらのうち卒前教育としては、「学部学科を超えた学生によるワークショップとフィールドワーク（以下WS/FWとする）」を、そして卒後教育としては「地域支援テレビシステム」を用いた遠隔指導・医療支援を実施してきた。

#### 学部学科を超えた学生による WS/FW

この企画は3日間の日程で行うものである。まず第一日目は小グループに分かれ、「地域医療」「チーム医療」というキーワードをもとに小グループディスカッションを行い、発表し合う。そして

二日目はそのグループで県内の地域医療機関を見学し、地元行政機関の担当者から地域医療の問題点などについて話を伺い、在宅医療の現場に同行させていただく。そして三日目にはこれらの体験を持ち寄り、グループごとに発表することで経験を共有する。その他にもこのWS/FW経験者を対象に1泊2日の佐渡での離島実習も行っている。

平成17年度第1回（平成18年3月）よりこれまでに、豪雪・離島地域を含め県内の様々な地域を舞台として、WS/FWは合計10回実施し、参加者は延べ人数で138名を数えた。WS/FWの実施に協力をいただいた行政機関は県内の8市町村、医療機関は15施設にのぼった。この活動は県内の様々な地域医療機関、地方行政機関との連携なしには行えず、これらの企画を通じて多くの医療機関や行政と連携が構築されている。

このWS/FW前後で参加者の意識を Visual analog scale (VAS) を用いて調査したところ、「地域で働く医療人は楽しそうである」「地域医療には夢がある」「地域医療にはやりがいがある」といった地域医療を好意的に見る項目において、参

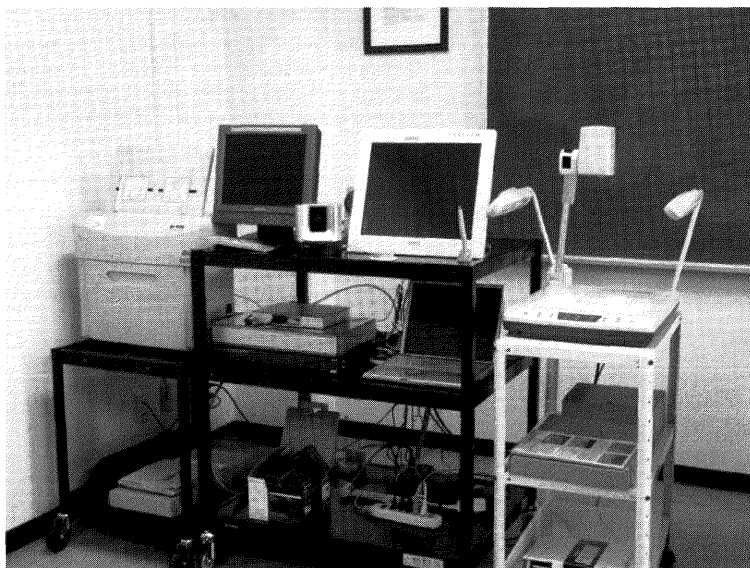


図2 地域支援テレビシステム

加後に有意に高くなっていることが示された(図1)。またこの企画に参加した学生を中心に、中越沖地震では医療ボランティアを行い、現地に赴き医療支援を行うことができた<sup>1)</sup>。この企画によって、行政を含めた多職種連携によりチーム医療が成り立つという意識が醸成されつつあると思われる。

### 地域支援テレビシステム

本プロジェクトでは、いわゆるへき地の地域医療機関、すなわち新潟大学臨床研修病院群研修プログラムにおける地域保健・医療研修を担当している複数の地域医療病院に、地域支援テレビシステムを導入した。このテレビシステムは、対面式に動画を送るメイン画面と、レントゲン写真や経過表などの画像情報を専門に送るデータ画面とに分かれており、双方向に音声や画像のデータを送り合うことができるものである(図2)。大学側ではそれらの画面を大画面のプロジェクターに映すことができ、多人数での視聴を可能にしている。この地域支援テレビシステムを用いた研修医教

育、地域医療支援については既に報告しており<sup>2)</sup>、専門的な症例の検討や、新人の研修会などでの利用実績が上がっている。

また、それ以外の使い方としては、地域医療機関でよくみられる疾患(ツツガムシ病、レプトスピラ感染症、マムシ咬症など)について、地域支援テレビシステムを介して大学病院の研修医に講義してもらうなど行った。その他に地域医療機関同士で情報を送り合い、講演会などを共有している。つまり、ある医療機関で講師に講演してもらうと同時に、その映像をこのシステムを用いて別の医療機関に送り、そちらでも同じ講演を聴講可能とした。さらに、地域医療機関同士で情報交換会を実施するなどにも利用されている。

一方、新潟大学では平成18年度より医学部医学科4年次学生を対象とした、本システムを用いた地域医療についての実習をカリキュラムに取り入れ、これまで3カ年にわたり実施してきた。医学部医学科では臨床実習に出る前に臨床実習入門という8週間のコースを設け、医療面接、身体診察、採血、縫合といった手技の練習など、臨床実習に必要な項目を実施している。このコースでは、

全学生が8～9名の12グループに分かれ、それぞれのグループが1コマ90分の異なるユニットを順次回るローテーショングループ実習を設定している。この中で「ユニット⑩地域医療」を設け、全ての学生に本取組を実施している。

このユニットでは、地域支援テレビシステムを用いて、実際の機器を学生自身に操作してもらう。大学病院内には現在2セット設置してあるため、学生はさらに2グループに分かれて、2地点間で実際に接続し、地域支援テレビシステムを用いて情報の伝達を模擬体験する。実際の機器を自ら操作し、同級生同士で行うことで操作の簡便さを知ることができる。

そして最後に、事前に依頼してあった県内の地域医療機関に地域支援テレビシステムを介して接続し、地域医療機関の医療関係者（医師、保健師、訪問診療の担当看護師など）から大学にいる医学生に、その地域医療機関の状況、地勢、地域医療の大変さ、そして何よりも地域医療に対するやりがいなどについて語りかけてもらっている。この講義では、地域医療の楽しさはもとより、様々な職種が関わり合って地域医療を支えていることに主眼をおいて話をしている。

地域医療教育の問題点は、大学病院がこれまで進めてきた高度先進医療とは異なる分野であり、地域医療教育を推進するにも医学部・大学病院が有効な資源（インフラ・マンパワー）、経験を十分に持つてはいないことにある。また、地域医療教育のフィールドの多くは大学から離れた場所にあり、地域医療教育を行うためには時間的・空間的制約を伴う。地域支援テレビシステムを用いることでこれらの問題を解決できる可能性が示唆された。

## おわりに

医療人GPの補助金により実施してきた「赤ひげチーム医療人の育成」プログラムにおける連携教育・支援の動きは、様々な効果を発揮し始めている。これまで余り地域医療に触れることのなかった学生に、地域医療に触れる機会を作り、地域医療に対する関心を引き起こしつつある。そしてこれらの試みを継続していくために、また地域医療を担う医師が定着できるように、GP終了後には本学独自の取組として事業を継続している。さらに、地域医療機関の医療者にも「学生教育に参加している」との意識を持ってもらえることで、現場のモチベーションを高めることも期待される。これらの取組を通じて、地元医療機関・行政・医療機関・メディア等で連携して地域医療を守る、という意識ができていくのではないだろうか。本プログラムにより、大学病院と地域医療機関との連携を深め、より多くの医療者に学生教育に参画してもらい、これらのインフラを医学教育の資源としてさらに活用する方法を確立していくことが期待される。

## 文 献

- 1) Iguchi S, Ohta K, Hasegawa T and Suzuki E: Medical Students Provide Volunteer Services Following the Chuetsu-Oki Earthquake. Gen Med (in press).
- 2) 井口清太郎, 藤澤純一, 太田求磨, 長谷川陸志, 鈴木栄一, 布施克也, 吉嶺文俊: 遠隔医療の活用—地域支援テレビシステムを用いた地域医療教育・連携推進の試み—. 日本遠隔医療学会雑誌 3: 305, 2007.